交叉点を構成する各街路の性格に着目した交叉点の景観特性に関する研究

―東京都心部における特徴的な交叉点を対象として―

A Study on Scene Characteristics of Crossroad in the Central Area of Tokyo
-Focusing on the Character of Each Street-

56934 後藤健太郎

This paper aims to analyze scene characteristics of crossroad .Crossroads had been various meanings in Japan, such as a border of town, and as a important place of city-life. Their meanings had disappeared from modern era because of more efficient function of transportation. However, we can see many characteristic crossroads today. Focusing on the character of each street which constitutes a crossroad, we divide scene characteristics of crossroad into 3 groups.

序章 研究の枠組み

序-1 研究の背景

日本の都市空間を歩くと、意外にも特徴のある交叉点が多い。街路の交叉形状自体に特徴のあるものから、角地建築が独特な意匠を放つものまで様々である。戦後の自動車優先の交通体系への変化により、交叉点が有してきた空間的意味やその表情を失い、交叉点は単なる交通処理の場へと変わっていった。しかし、実際の都市空間を歩いてみると、特徴ある交叉点が多く、魅力的な交叉点を創出する空間技法が潜んでいるように見える。

序-2 研究の目的

本研究では、現存する特徴のある交叉点の分析を通じて、 それらに共通する特性を読み取ることを目的とする。

序-3 用語「交叉点」に関して

本論では、以前使用されていた「交叉点」を使用する。 「差」という漢字の代用は、「叉」という漢字が当用漢字 及び常用漢字に採用されなかったによる。

序-4 既往研究のレヴュー

交叉点は多様な側面を持っており、様々な分野からアプローチが可能である。本研究では、交叉点に関する研究を大きく二つに分類して整理する。

- ◆交叉点の空間構成に関するもの
- ○角地に位置する建築に関して

歴史的な研究としては、玉井哲夫によるが江戸初期の楼閣風の意匠の三階櫓や**1、陣内秀信による明治・大正・昭和期の角地に正面を向けるなどの特徴を持つ建築に関する研究がある**2。現在の空間を対象とした研究では、角地建築の形態を分析するものが多い。

○街路パタン (街路の交叉形状) に関して

植らは、東京の街路パタンについて検討を行い、江戸には すべての道が一点で集まる求心的パタンがないことを指 摘した**3。

- ◆交叉点の機能・意味に関するもの
- ○広場的性質に関して

陣内秀信は交叉点では都市活動が活発で広場的性格を 持つことを指摘し、角地建築がその性格を強めたとしてい ス※2

○境界性に関して

オギュスタン・ベルクは、日本の空間構成の論理において「境界域性」が重要性されることを指摘しつつ、結びつける場として重要な位置づけがなされる都市の交叉点は、都市性を凝縮した場であると述べている*4。

序-5 本研究の視点と位置づけ

本研究の視点は以下の通りである。

◆街路から交叉点の特徴を分析する

角地の建築に関する既往研究は多いが、街路に着目した 研究は、街路パタンに着目したもののみで非常に少ない。

◆街路と街路の関係を分析する

街路パタンが交叉点に接続する街路を全て同等に扱う のに対し、交叉点を構成する各街路の性格を捉え、それら の関係を捉える。

◆街路を分析した上で角地を考察する

単に交叉点だから角地建築が独特な表情を醸し出すのではなく、様々交叉形状や交叉点を構成する街路の特性に応じて角地建築が建てられているのはないかという点に関しても調査する。

以上の視点を設定すると、研究の目的は、特徴的な交叉 点を対象として、交叉点を構成する各街路の特性を把握し、 それらの関係を見ることで交叉点の特性を読み取ると言 いかえられる。

序6 研究の対象区域の設定

本研究では東京かつ都心部に設定する。東京は、江戸期に多く存在した下町の辻・丁字路や山の手の三叉路・四叉路が、近代以降の都市化の影響により様々な空間の変容を遂げて多様な景観が生まれていると考えるためである。都心部と限定するのは、人々が集まる場所であるため、交叉点が認識及び意識されやすく、そのため交叉点に何らかの技法が宿っている可能性が高いと考えるからである。

第1章 交叉点に関する用語の確認とその歴史的意味

1-1 交叉点に関する用語とその空間

(1)日本における歴史的な用語の確認

「辻」・・・(国字)

- ①道路が十字に交差している所。十字路。四つ辻。交差点。
- ②人が往来する道筋。路上。道ばた。ちまた。

「巷・岐・衢」・・「道股(ちまた)」の意

- ①道のいくつかに分かれる所。分かれ道。 辻。 岐路。
- ②町の中の道路。街路。また、町中(まちなか)。賑やかな所。
- ③世間。世の中

「追分」・・・①道が二つに分かれるところ。分岐点。

「辻」は国字であることや、交叉点を示す用語が単に点 を示すだけではなく、道や町を示している。

(2) 近代以降に新たに出現した用語の確認

「交差点」・・・十字路、丁字路 (T字路) その他二以上の道路が交わる場合における当該二以上の道路の交わる部分「丁字路」・・・丁字形になっている道路。T字路。

「叉路」という用語に関しては、三叉路・五叉路等の具体 的なもの以外は、辞書では確認できなかった。

1-2 交叉点の歴史的意味・機能のついて

歴史的には日本の都市空間において交叉点には様々な意味が込められてきた。それを示すように辻を用いた熟語は約50個にものぼる。古来より交叉点が有する機能を、境界性、焦点性、追分性の三つに着目して整理する。

(1)交叉点の境界性

◆聖俗の境界

辻は、あの世とこの世を繋ぐ境界として考えられていた。

◆町境/支配の境界

近世において、交叉点は両側町の境であることが多く、 自衛のために町境に木戸が設置された。

(2) 交叉点の焦点性

◆都市活動

「辻説法」「辻芸」「辻相撲」など都市生活の焦点として

辻は存在していた。

◆祭事

祭りの際には、神は社殿ではなく辻に祭場を設けて祀られることがあり、「辻祭(つじまつり)」と呼ばれた。

◆付属設置物

交叉点には様々な付属物が設置された。辻札、辻片、辻 番付など生活に関わる情報は、交差点に張り出された。

◆角地という立地と建築

日本の建物は木造で矩形であるため、交叉点に正面を向ける建物は少なく、西洋のような求心的な街路パタンは現れなかったと考えられる。しかし、町人地においては交叉点の角地には重要な商店が立地していた。

(3) 交叉点の追分性

追分として、道が分岐し異なる二つの目的地を明示する。

(4)空間と機能

前項を踏まえて空間と人々の活動に着目すると以下の 表のように分類できる。

	空間や設置物及びその意味	人々の活動
境界性	辻堂、木戸、辻番所、辻神、	辻斬、辻固め、辻強盗
	辻地蔵、辻社、	
焦点性	辻行灯、辻便所、辻風呂、辻	辻相撲、辻説法、辻占、辻斬、
	札、辻片、辻車、辻番付、辻	辻芸、辻講釈、辻説法、辻立ち、
	店、三階隅櫓、辻燈篭、辻車	辻君、辻祭、辻能、辻取り、辻
		談義、辻冠者、辻踊り、辻商い、
		辻駕籠、辻勧進、辻能、辻馬車、
		辻噺、辻法印、辻宝引き、辻打
		ち、辻喧嘩
追分性	岐の神、道祖神	

図1 交叉点に関する熟語の分類

1-3 小結

古来より人々が向けてきた交叉点に対する意識は、交叉 点に関する「辻」という国字やそれを用いた熟語等を通す ことにより、より明確になる。大きく「境界性」「焦点性」 「追分性」の三つに分類することで、交叉点が単なる空間 構成を越えて重要な意味を持っていたことがわかる。

第2章 交叉点の景観の研究手法の確立

2-1 既往の知見に見る交叉点の景観把握の視点

(1)分類の仕方と視点

本章では景観に絞って、既往の交叉点の景観の研究を序章で述べた三つの視点に基づき整理する。そして、本研究での交叉点の景観把握において、具体的にどのような事項に着目して分析すればよいかを探る。

(2)既往の知見に見る交叉点の景観把握手法の整理

○街路の交叉形態

交叉点の基本的な空間の特質。結節する街路の数(三叉路/四叉路など)、及び交叉形態の幾何学的特性(整形/不整形)を捉える。プランとしての把握。

○交差点の空間形態

交叉点という点に着目して把握する。不整形な叉路により生まれる不整形な交差点の膨らみ。角地に施された隅切り。街路と角地の双方によって認識される。

○角地の建築及び付属構築物の特徴、ランドマーク

角地の特徴的建物や樹木等がランドマークとして景観 を特徴づける。街路の交叉形状とは、直接は関係ない。

○接続する街路景観及び街路上構築物

接続する街路の景観を相対的・比較的に認識するが、全ての街路を対象としてはいない。

○視点(場)の多様性と視線

視点を地上に設定せず、プランからの把握する場合もあれば、交叉点の内側から把握するもの、角地から交叉点を 把握するものなど様々である。

このような視点場の多様性に加えて視線も変化する。交 叉点を建物と街路の総体として扱い、視線の抜けによる領 域感を捉えるもの。視距離と人々の認識から囲繞を通して 交叉点の広場的なまとまりを捉えるもの。

2-2 本研究での分析視点

(1)交叉点を構成する街路に関して

前節までの既往の観かたに加えて、次の例を挙げて人々の景観把握の視点をもう一つ述べる。下の写真の交叉点は、JR 池袋駅西口から西に向かって進んでいくと出会す交叉点である。交叉点表示によると交叉点の名前は「二叉交番前」である。当地点で眺めると一見二叉とは分かりにくいが、地図で確認すると確かに一つの道が分岐して二つの道となっている。







図2 西池袋にある二叉

図3 二叉。地図に加筆し明記

図4 前図と同じ交叉点の地図に筆者加筆

ここで再度交叉点という点に目を向けると、交叉点を中心に三つの道が一つの点に結節しており、一般的には、三 叉路と呼んでいる。



また一見二叉と認識できない理由は、二叉を構成する街路に幅員の差があり、交叉点から見て三つの街路のうち二つは、現在は一つの広幅員街路に見えるためである。一つの広幅員の街路に、それより相対的に狭い街路が接続していると述べるほうが、地上で見た交叉点の景観を述べるのに近い。

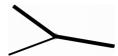


図 7 一本の広幅員の街路と相対 的に狭い街路。計2本から成る交叉 占

三叉路等の用語では、交叉点に結節する街路を等価に扱い交叉点を把握しているが、実際に都市空間を歩いて交叉点という空間を体験すると、交叉点に結節する街路がそれぞれ独立していることは少ない。形成時期の違いや後の街路拡幅・街路新設等により、各街路が異なる性格をしている場合と同じ性格を帯びている場合がある。このような街路の特質に着目すると交叉点の景観の特徴がより明確に見えてくるのではないだろうか。

(2) 各街路の性格把握の視点

以上のような交叉点の景観は、形成過程と追うとともに、 幅員の相対的な差や街路と街路の関係に着目することで 見えてくる。

I. 進入方向(視線)

交叉点に進入し、大きな方向転換を行わず自然と進行方 向の街路に入る(抜ける)か、否かを判断する。交叉点を 挟んで視線が抜けているか否か。視線が抜けたあと視線が 曲がるのは問わない。

Ⅱ. 幅員

結節する街路と街路の幅員が同じか異なるかを判断する。ただし。大きな方向転換を必要とする場合は、同じ幅員でもひとつとはみなさない。またIを満たす二つ以上の街路も、幅員が大きく異なる場合は、街路は別のものと考える。

以上の二つの交差点の性格に着目して、交差点の景観を把握することとする。

(3) 交差点を構成する街路の関係について

交叉点に結節する街路と街路を「幅員」「進入方向」から分析すると、交叉点を構成する街路と街路の関係から、 以下の三つ特徴のある街路に分類できた。

◆貫通路

貫通路は構成される街路双方から見て進行方向が一対 一の関係で、交叉点を挟んで幅員がほぼ同じもの。必ずし もまっすぐ貫通するとは限らない。

◆結節路

街路の性格が他の街路と異なり、交叉点を貫通しない街路。 直進していても幅員が異なるものは含めない。

◆分岐路

ある一つの街路から交叉点に進入し、二つ以上に分岐する街路で、分岐した街路の幅員がほぼ同じもの。この交叉点の特徴の一つだが今回は貫通路と異なり、交叉点への進入方向が相互に成り立たない。

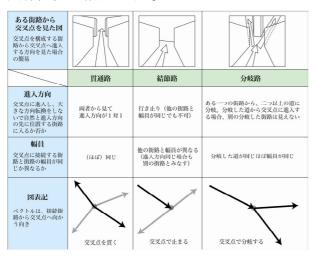


図8 各街路の性格と交叉点を構成する街路との関係の図

(4) 交叉点の景観分析に関して

交叉点は「貫通路」「結節路」「分岐路」の組み合わせ によりできている。これらの街路の組み合わせによりでき る交叉点の景観を分析して、特徴を捉える。

2-3 形成過程について

交叉点に結節する街路の形成順序を把握し、街路と街路 の関係を捉える。最終的には実地調査において確認する。

2-4 小結

本章では、これまで整理されていなかった交叉点に関する様々な景観の捉え方を整理した。その上で、一つ事例を取り上げ、本研究における交叉点の景観を把握するために、交叉点を構成する各街路を「進入方向/幅員」に着目し「貫通路」「結節路」「分岐路」の三種類に分類した。

第3章 研究の意義と事例の抽出

3-1 特徴的な交叉点の事例研究の意義

本研究では、特徴的な交叉点に的をあて、交叉点の景観 を研究する。

◆古来よりの受け継がれてきた交叉点に対する意識

第1章で述べたように交叉点には何かしらの意識が注が れてきており、その意識が近代以降の都市化を経て現在の 交叉点になんらかの影響を与えていると考える。

◆交叉点に共通する特徴が強く表れていると思われる特 徴的な交叉点

本論文の目的は、交叉点を構成する各街路に着目して、 交叉点の景観特性を読み取ることである。そのため、抽出 する交叉点に見られる特徴は、ここで取り上げていない交 叉点にも表れている場合もある。また、抽出する交叉点の数についてだが、交叉点の特性を読み取るのにわかりやすい例を幾つか事例として使用するのであって、数には意味はなく、分析事項の結果や交叉点の景観の特性が重複する場合もある。既往の研究では、範囲を設定して全ての交叉点を分析対象とするが、本論分では、特徴的な交叉点のみを扱う。特徴的な交叉点は、交叉点を構成する各街路の性格やその関係が読み取りやすく、特徴が明確に表われていると考えるからである。

3-2 特徴的な交叉点の事例の抽出基準

「貫通路」「結節路」「分岐路」の組み合わせで構成される交叉点で、特徴があるものを抽出する。貫通路と結節路の組み合わせや貫通路と貫通路の組み合わせは、都市で非常に多く見られる交叉点である。分岐路に関しては、分岐路そのものが特徴的であるため、抽出する交叉点は、分岐路が、貫通路と結節路と組み合わさってどのような特徴を持つかを考察するのに重点を置く。

3-3 事例の一覧

3-4 事例の概要項目及び分析

18 の交叉点を事例として扱う。(18 事例は次章に全て事例 を記載。次章参照。事例概要に関しては、省略。分析の結 果は次章の図中に表現した。)

第4章 事例の分析

4-1 特徴的な交叉点に表れる共通した景観の特性

前章で、前事例を「貫通路」「結節路」「分岐路」の三つを用いて記述した。本章では、それらの組み合わせにより浮かびあがる交叉点の景観特性を述べるとともに、角地の建物と特徴との関係についても記述する。

(1)典型的な交叉点

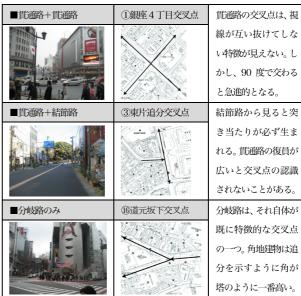


図9 典型的で特徴的な交叉点の景観特性

3 種類の街路の二種類の組み合わせの交叉点は非常に多 く見られるが、その中で典型的ではあるが特徴的な交叉点 の景観は、以下の三つに分類される。

(2)特異な交叉点

■近接する結節路と結節路が生み出す景観(+貫通路)

⑤本郷5丁目交叉点	⑧東片大縄地交叉点	⑩麻布一本松交叉点
	SE 778	

図 10 事例





図11 本郷五丁目交叉点(左) 図 12 東片大縄地交叉点(右)

交叉点の特徴は、交叉点の中からではなく、交叉点に接 続する結路から見るとはっきりと認識できる。結路から見 ると、視線が結路正面の建物等に遮られると同時に、結節 路に視線が抜ける。交叉点にズレが大きい場合、交叉点に 膨らみができて視界が大きく開くことや、広場のようなま とまりある空間を生み出すこともある。

形成過程を見ると、結節路はもとより交叉点を意図して 作られた街路ではなく周辺のまちの構造を受けて作られ た街路で、交叉点はそれらが繋がってできたため、このよ うなズレが生まれ、特徴がはっきりと出ている。

いずれも街路の中心を歩行可能な場合。幅員が広い場合 は、このようなズレは、幅員による視界の開きの中に埋も れてしまい、目に留まらない

■貫通路と結節路の幅昌偏差による景観

一只他们 これはは シース 個人に こう シス 見				
②駿河台下交叉点	⑨白山上交差点	①仙台坂上交叉点		
THE PROPERTY OF THE PROPERTY O				





図 13 事例 図 14 駿河台下交叉点





図15 白山上交叉点(左)

図 16 渋谷駅前交叉点(右)

二つ広幅員の貫通路が交叉してできる交叉点に対し、相 対的に幅員の狭い結節路が接続することで、逆に狭い幅員 の街路、つまり結節路が交叉点において浮き上がる。視点 場は、結節路に対面する交叉点の角地となり、交叉点から 離れた地点では、この景観は認識できないが、各街路の性 格との差が結節路を浮き立たせている。

このような交叉点では、駿河台下交叉点のように角地に 特徴的な建物がなくても、交叉点は特徴を放ち、ここでは、 結節路上のゲートだけではなく角地の建物のボリューム が、結節路を浮き上がらせるのに役立っている。更に、渋 谷駅前交叉点のように、角地に特徴的な建築があると、よ り交叉点の景観は印象付けられる。

また、この景観の特徴は、一つの貫通路からは生まれな い。一つの貫通路と一つの結節路に幅員の差が大きくある 場合は、交叉点と認識しない、または、結節路に対面する 角地視点場が生まれない。二つの広幅員街路が交叉するこ とでその場所が交叉点としてまず認識され、二つの街路が 交叉してできる大きく視界の開けた空間があるため、結節 路がより強く浮かび上がる。

形成過程を見ると、近代から現代までに行われた街路の 拡幅や、新たな街路の設置や、街路の取り付けの変更など によって生まれている。

■分岐路の方向性が保たれている景観(+貫通路 or 結節 路)

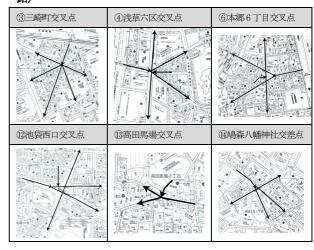




図 17 事例





図18 目黒八幡宮前交差点(左) 図19鳩森八幡神社前交差点(右) 貫通路や結節路と組み合わさると交叉点は求心的にな るが、分岐路としての街路形態が他の街路による影響を抑 えて、交叉点に方向性を与えている。

貫通路が分岐点を横断する場合は、分岐路としての景観は大きく変わらない。分岐路に結節路が交わるときは、分岐路としての方向性が多少弱められる。また、貫通路が分岐点と一致しない場合が多く、進行方向に向かって空間が広がる。交叉点の中の空間も、分岐路の方向性につられて偏った広がりを持つ。

分岐路の中では、このような分岐する道の機能に応答して、角地には角に一番の高さを配した建築が立体的な景観をつくりあげているものが幾つか存在する。

4-2 形成過程に着目した分析

交叉点の空間の変化と形成過程に関しては前項参照。各 街路の性格の変化は、図17の通り。

4-3 小結

本章では、「貫通路」「結節路」「分岐路」の組み合わせによって交叉点の景観特性を把握すると、「典型的な交叉点」と「特異な交叉点」という大きな分類でき、「特異な交叉点」には以下の三つにより纏められる。

- ・近接する結節路が生み出す景観
- ・貫通路と結節路の幅員偏差が生み出す景観
- ・分岐路の方向性が保たれている景観

また、本章では、多叉路が持つ交叉点の景観特性を示す ことができた。

終章 結論

終-1 結論

本研究より得られた知見を纏めると次のようになる。

◆研究手法に関して

交叉点を構成する街路と街路の関係を「進行方向/幅員」

の2項目から分析すると、交叉点を構成する街路と街路の 関係は「貫通路」「分岐路」「結節路」の3種類に分かられ る。そして、すべての交叉点が、この3種類の街路を用い て表記できる。

◆得られた知見に関して

上記の3種類の街路の組み合わせを通して特徴的(特異) な交叉点の景観を把握すると、共通する景観の特徴は既に 言及されているものも含み、以下の三つであった。

- ・近接する結節路と結節路が生み出す景観
- 貫通路と結節路の幅員編差による景観
- ・分岐路の方向性が保たれている景観

既往研究では、十字路・三叉路以外の交叉形状をこれらの変形だとして特別に扱うことはなかったが、多叉路が十字路・三叉路にはない特徴を有していることを示した。更に街路の交叉形状と角地建築の関係について街路形状と角地の関係を提示した。

貫通路	もとより一つの街路であった (水路の	多くの事例にこのよう
	暗渠化も含む)	な街路が含まれる。
	もとは結節路だったが、交通機能を高	⑥東片追分交叉点
	めるために、他の街路と組み合せら	
	れ、貫通路へと変わった	
結節路	もとより結節路であった	⑥東片大縄地交叉点
	新たに街路を交叉点に向けて加えた	18目黒八幡宮前交差点
	交通の観点から、街路の組み合わせが	⑨仙台坂上交差点
	変えられ、もとは一つの貫通路であっ	
	たが、分節させられ残った	
	街路拡幅で交叉点に接続した	16西恵比寿交差点
分岐路	もとより分岐路であった	18目黒八幡宮前交差点
	計画されて形成されたもの	③浅草六区交叉点 ②
		三崎町交叉点
	もとは別の街路だったが、後に拡幅を	⑤道元坂下交叉点
	受け一つとなった	

図20 各街路の性格の変化

脚注及び参考文献

※1 玉井哲夫「江戸 失われた都市空間を読む」平凡社、1986 ※2 陣内秀信「都市空間の人類学」ちくま学芸文庫、1992 ※3 槇文彦他「見えがくれする都市」鹿島出版会、1980 ※4 オギュスタン・ベルク「空間の日本文化」ちくま学芸文庫、1994 【1】 野嶋慎二『三叉路からみた江戸・東京の空間システム』日本建築学会 シンポジウム「江戸空間・東京空間・江戸空間システム」寄稿論文、2006/09 【2】木下智康「交叉点の空間特性に関する基礎的研究—都市広場としての潜 在性に着目して一」東京工業大学卒業論文、2006